

PHOTO ESSAY

東広島キャンパスの自然(植物)

-16-

理学研究科生物科学専攻
博士課程前期2年

岸田 章 一



Ⓜ マツ枯れ跡地に繁茂したウラジロ



ウラジロ

Gleichenia japonica



春になると、古い葉の上に新しい芽を伸ばす

左のメジャーは2m



近年、全国的にマツ枯れ現象が広がっており、アカマツ林は見
るも無惨な姿に変わっている。東広島キャンパス内のがら山な
ども例外ではなく、立ち枯れたアカマツがやたらと目につく。
さて、マツ枯れによって荒れ果ててしまった林は、その後、一
体どうなるのだろうか。まず、アカマツが枯れてしまうと、それ
まで暗かった林床に光が入り明るくなる。すると、林の中の陽生
植物が繁ったり、外から他の陽生植物が侵入したりする。このよ
うな陽生植物の一つにウラジロがある。
ウラジロはウラジロ科のシダ植物で、葉は常緑性である。和名
は、葉の裏面が白いことに由来し、漢字では「裏白」と書く。開
けた場所に大群落をつくるが、根茎は地中を長く這い、あちこち
に葉をつけるので、地上部の葉の枚数を数えただけでは個体数は
分からない。別の個体だと思っていたものが、実は根茎でつながっ
ていたりする。二枚が対になった羽片は、一年で一段ずつ伸びて
いくので、何年か経つと、大きいものでは地上部の長さが二倍を
越える。日本では新潟県・山形県以南から琉球列島にかけての暖
地に分布する。
このウラジロ、よくお正月のしめ飾りに使われるのだが、なぜ
使われるのか理由ははっきりしない。一年に一段ずつ伸びていく
ことが、代々の栄えを表し縁起がよいか、二つの羽片が向き合っ
ているので、夫婦が仲良く暮らせるようにとか、裏が白いので、
共に白髪が生えるまで長寿を願うとか、いろいろな説がある。ど
の説が正しいのかは解らないが、どの説もウラジロは縁起物であ
ることでは一致している。
さて、マツ枯れの後、林床にこのウラジロが繁茂すると、地表
面は光を遮られるため暗くなる（日光の約九九%が遮られる）。
そのため、光合成に必要な光量が不足するので、他の植物は侵入
できない。またウラジロは、他の植物の発芽を抑制する物質も放
出する。こうした理由でウラジロの大群落は、他の植物の群落に
変わることもなく長期間持続する。
自分に適した環境を見つけると、真っ先に生育場所を確保し、
他の植物の侵入を許さない。ウラジロは何となくまじい植物だろ
うか。自然界でのこうした植物たちの生活戦略を見ていると、興
味はつきない。

(きしだ・しょういち)